
人魚

J.S.アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚

【Zコード】

N1097A

【作者名】

J・S・アルト

【あらすじ】

中学生の響は青い夢の中にいた。その夢から響の奇妙な日々が始まる。

第1話・蒼い夢（前書き）

今回初めての小説なので、読みにくい部分があるかもしれません、最後まで読んでくださるととっても嬉しいです。

第1話・蒼い夢

青年はゆっくりと周りを見回した。すると、澄み切った水の向こうから人影らしきものが見えた。淡いオレンジの髪をした、女の人の影。

けれど、その人影は普通の人とは少し違つた。まず、酸素ボンベのようなものは、一切つけていない。

人影に足のようなものはなく、かわりにひれがついていた。その、人のような影はものすごい速さで青年の方へ向つてくる。

「響。^{ひびき}」

「誰？」

「私はマーメイド、貴方の夢の住人よ。」

「知らない。どうして・・・僕の名前を知ってるの？」

「貴方が産まれる前から知ってるわ。」

マーメイドは微笑みながらそう答えた。

「ここは・・・？」

「言つたでしょ？私は貴方の夢の住人だつて。」

「じゃあ、ここは僕の夢の中？。」

「そうよ。私は響の中にいるの。さあ、いきましょう。」

「いいくつでどこに！？」

二人の後ろにはイルカの群れがせまつている。

響とマーメイドはイルカの群れに囲まれながら泳いだ。イルカと泳いでいるうちに、響はだんだん楽しくなつてきた。

響の気持ちが変わり始めると、それまで水草しか生えていなかつた海のそこに、珊瑚や磯巾着、魚が泳ぎだした。

「あれ？さかなが。それに珊瑚も・・・」

「不思議？ここは貴方の夢の中よ。貴方の気持ちしだいでいろんなものがでてくるわ。」

「じゃあ、なんで君が出てきたんだ？。」

「それはね。。。あなたが恋しく思つたからよ。」

「誰を?。」

「1 : : 1 s m @ , k v n k . 5 8 9 k n - - - . m 。」

「えつ?何?よく聞こえない。」

マーメイドの声がよく聞こないと思つたら、だんだん周りがぼやけてきて、最後には真っ暗になつた。

第2話・事故&花束

どたつ

「あり？」

ベッドから落ちた響は夢の世界から一気に現実世界に引き戻された。マーメイドの言っていた事がききとれなかつた響は、半分やるせない気分になつた。

「あーくそつ！…だれなんだよ！」

「響ー！朝」はんだよー。でておいでー。」

そう呼ばれて響は学校の制服に着替え、階下に降りていつた。「いいかげんにしてくれないかな？毎回僕を呼ぶのに「でておいでー」なんていうのやめてくれる？」

「どうして？」

「…・犬みたいでやなんだよ。」

「わかつたわ。おつと、もう！」とな時間。響、あとよひしへね。」

「うーい。
〔ハルカ
遙、車に氣をつけるんだぞ。」

「はーい。いつてきまーす。お母さんいつてきまーす。」

「いつてらつしゃーー。」

響とお父さんのハモリで姉は送りだされた。

え？お母さんがいな？まあそれはいづれ説明しよつ。

今日は夏休み明けの始業式だ。休み明けとはいってもまだ暑い。朝とは思えない日差しの中、なるべく影の道を歩いて登校する。

「おはよー！響君！」

すると、田の前に一人の女の子。同級生らしい。

「お、おはよー。」

不意をつかれたので、いたさかびっくりした様子だ。

どうでもいいことだが、響は遠くから見ると意外とかっこいい。

すらりと伸びた背に半袖のホワイトシャツとネクタイがかつこよく
きまつっている。

右手には腕時計をしている。黒い髪は短くつややかだ。

女の子の方はそんなに背は高くはないが、姿勢はかわいかつた。
半袖のホワイトシャツに赤いチェックのスカートをはいて、長い髪
は一つに束ねられ、三つ編みになつていて。

そうそう、女の子の名前は・・・

「明日香、前。」

「前?。」

ガンッ

「前みて歩けよ。」

「ふあい。そ、うしまふ。」

学校について、始業式が始まった。

「でわ、校長先生から一言お願ひします。」

「おほん! 残念ながら、悲しいお知らせが一つあります。本校の生
徒、一人が事故に遭いました。」

校長がそう話すと、体育館の中はざわめいた。

「お静かに!。校長、続きを。」

「自転車に乗つてふらりと飛び出して・・・・・よけ切れなかつたそ
うです。皆さん、くれぐれも気をつけください。」

式が終わつて家に帰る途中に、響は教室に忘れ物をしていたこと
を思い出した。

急いで学校に引き返し、教室に向かつた。教室のドアを開けて自分
の机に向かうと、そこにはひとつつの花束が置いてあった。

響はただの悪戯だと思い

「なんだよこれ。俺はあの世の人じゃないつーのーー。
と、なじつた。」

とりあえず花束をどうじょうかと思い、教室にあつた花瓶に花束を
生けておいた。

帰り道、人通りの少ない道を一人歩いていると、突然大きな音をたててトラックが走ってきた。

「なんで・・・。」

響はその場から動けなくなつた。頭ではわかっているのだが、体が言つことをきいてくれない。

「動け・・・動いて・・・。」

トラックはどんどん近づいてくる。

「あぶないつつ！！。」

誰かが響を横から突き飛ばした。トラックが通り過ぎ、後には響と女の子が残つた。

「いつて～・・・。」

「大丈夫？ダメじゃない、ボーッとしてちゃや。」

「すんません。つてどなたですか？。」

「え？あたし？あたしは・・・ただの通りすがり。気にしなくていいわよ。」

「でも・・・。」

「あたし、急いでるから。お大事にね。」

「あ、はい。ありがとうございました。」

そういうて女の子と別れると、響は変な気持ちになつた。

「どこかで見たことがあるんだよねえ・・・。」

でもそんなことはすぐに忘れた。

家に着くと、すぐに寝てしまった。また夢をみた。青い海だか空だかわからぬいような景色だ。

人魚がいる・・・人魚が俺に話しかけてきた。

「どうだつた？一日目は。」

「・・・え？一日目・・・？。」

半分ぼんやりとした頭でそう答えた。

「そう。一日目。早く日がたつといいわね。」

そう言うと人魚は泡になつて消えた。人魚が消えるときに、響は人魚の顔をみた。

顔を見るが、響は「あこひでぬ・・。」とぽんやついた。

第2話・事故&花束（後書き）

え～っと。人魚の第一話です。読みにくかったらすみません。「>話の内容がよくわからないときがあると思いますが、それも話の流れなので「あ～こんななんなんだ～」って読み流してもらつて構いませんので・・・。これからも「人魚」をよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1097a/>

人魚

2011年1月26日06時45分発行